

伊藤外科ニュース



84号

2011.5 発行

新緑の季節に向けて

私は今年も、桜や他の艶やかな花々を見て春を堪能しました。お花見でお気に入りの場所は、新宿中央公園、神田川の遊歩道、新宿御苑などですが、例年より花の色は淡いように感じたのは私だけでしょうか。春の花が終わると、今度は新緑の季節ですね。中央公園に接した十二社通りの坂道は、街路樹の若葉の香りが素晴らしく通勤が楽しく感じます。



新宿区住民検診

さて、今年もまた住民検診が始まります。行政は働き盛りの方の受診率が低くて困っているようです。

40歳から60歳代の働き盛りの方は、一般に持病の慢性疾患がないか、病気に気が付いていない場合が多く、医療機関とは縁がありません。また、忙しい時間を割いて健康診査を受ける余裕もなく結果として病気がかなり重くなって来院されます。さらに、50歳代以降は、悪性の病気が出てくる時期です。是非、健康診査を受け自分の健康管理を始める契機としましょう。

新宿区では、会社勤めの方でもガン検診が受診可能です。また、通院中の中高齢者の方は忙しい家族の方にも健康診査を進めてはいかがでしょうか。



貧血の話

今回は健康診断でしばしば指摘される「貧血」の話をお話いたします。

貧血とは、血液中の血色素(酸素を運ぶ働きがあります)が低下した状態です。一般の外来や検診で見つかる慢性の貧血の場合には、特徴的な症状はなく慢性的な疲れやすさや階段の上り下りの際の息切れの悪化などを自覚することがある程度です。

貧血の原因は多彩ですが、血色素の原料となる鉄分の不足による貧血が圧倒的に多く認められますので、今回は鉄欠乏性貧血について書きます。

貧血は女性に多く、鉄分の不足の要因として閉経前の女性であれば、月経過多症など婦人科疾患が病気としては先ず考えられます。以前は過度なダイエットによる食事性の貧血の方も来院されましたが最近健康ブームの為かあまり見かけなくなりました。

閉経後の女性と中高年の男性の貧血は特に注意を要します。その原因として、胃ガンなどの悪性の病気が存在する確率が増えてくるからです。

その他の原因として肝臓病、腎臓病、リウマチなどの炎症性疾患も念頭に入れて検査を行います。また、更に超高齢者になると歯の不具合や嚥下力の低下により病気がなくとも鉄分の不足を招くこともあります。

いずれにしても、鉄欠乏性貧血を指摘された方は、以前の血液検査の結果と比較することが必要です。そのうえで、単に鉄分の補給をするのではなく、何が原因で貧血となったかを医師と共に検査し、原因となった病気自体の治療をして下さい。



(院長)



今回の一冊

異見あり

養老孟司著

3月11日から1カ月以上がたった。これを書いている日は満月から数日後。昨日のニュースでは、地盤沈下した東北沿岸地域の町が大潮で浸水したことが報道されていた。昨晩は東京でも寝しなく起こされるほどの余震。被災地の人々はどんな思いで毎日を過ごしているのか……。

震災後まもなくの、どちらかの知事の「天罰発言」が問題視された。どういう文脈での発言か全貌がわからないが、少なからず公人である。ご自分の立場とタイミング、それが読めない判断力と感性はいただけなかった。

十年来、己が心にひとつの座標として置かれている歌がある。

なにごとの おはしますかは知らねども かたじけなさに 涙こぼるる

鎌倉時代の僧・西行法師が伊勢神宮の五十鈴川で呼んだとされる歌だ。「どのような方々がいらっしゃるのかは存じませんが」といっているが、つまるところ、自然を始めとする万物がともにあること、そのこと自体にかたじけない思いでいっぱいになり、涙がこぼれてくるといっているのだと思う。

とある和尚さんが言っていた。世の中「エコ、エコ」と騒いでいて、「地球にやさしく」とか言っているけれど、それ自体が人間のエゴ。「地球にやさしく」ではなく、「自然や地球のおかげ」で人間は生かされているのだと。

それにしても、自然に対してもっともおごり高ぶっているであろう都市部ではなく、自然の恵みと脅威を身をもって知りつくし、自然とともに暮らしてきたであろう東北沿岸部の人々が、筆舌に尽くし難い悲劇に襲われたことに言葉もない。

今回は前置きが長くなってしまいました。こんなことを考えていたとき、週刊文春に掲載された養老孟司氏の対談で、大震災の後、日本人があらためて考えなければいけないこととして、上記と同じようなことを話されているのを目にした。ちょうどその時、三弓の本棚から引っ張り出していたのが、氏が週刊誌に連載していたものをまとめた『異見あり』（文藝春秋社刊）。残り行数が少ないので、本書の中から最も腹に響いた一文をご紹介します。

いまの若者にとって、知とは、外在化したものなのである。「自分」と関係のないところに「知」がある。知識は本のなかにあり、インターネットのなかにある。(中略)知識というのは、実は自分を変えるものなのである。たとえば病気の告知を受け、自分が重い病であることを知れば、知った瞬間に咲いている桜が違って見える。それは桜が違うのではなく、知ることによって自分が変わるからである。また、自分が去年までどういう気持ちで桜を見ていたかを思い出そうとしても、生き生きとは思い出せない。過去の自分はすでに別の自分だからである。

「知る」ということは、本当はそういうことなのだ。

今回の大震災を経験して、私たちはそれぞれ、いったいなにを「知った」のだろうか。

(一弓)